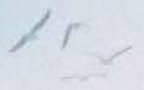


てづくりのしる

Biotopos

滋賀県立大学は「環境大学」で国内初の環境の総合大学として「環境」をテーマに創設された大学である。今年で創立 29 年という歴史を刻み、大学時代には対して環境をテーマに、教育に携わられた者も少なくない。生き物たちの暮らし場となっている。この生き物は「教育施設」「大学」をいう言葉の背後に、大学という教育研究機関の枠を超えて地域の「しる」を作り出すことを目指す。大学内の環境に生息している鳥や、川、池、土等の自然環境を題材とし、大学生と保護官によって繰り返し行うワークショップによって建築する。先に建築をつくるのではなく、設計を通して、それを自ら意識し、彼らの方でつくりあげることによって環境の生態系を守りながら新たな関係性や暮らしの調整がなされていく。



1_【分断→共生】する環濠へ

●背景__滋賀県立大学=環濠集落といえるのか

滋賀県立大学は琵琶湖畔の環濠集落に位置し、環濠内の中庭に広がるウォーターフロント方式により約60年にわたる大学のコンセプトは「環境共生」である。湖と生態系につながる生き物系をキャンパスに引き入れ、環濠という「水」により秩序づけられた「集落」を創出した。また内庭に引かれた「環濠」を維持し、また内庭の生態系を人為的に組み込むことで「生き物集落」が形成できると述べている。

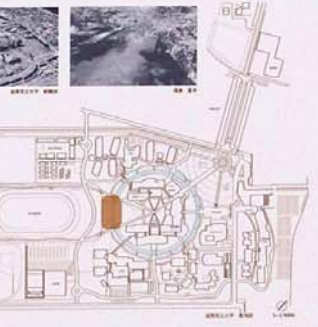
●環濠の周辺には多様な生き物が暮らし、必要に応じて様々な環境をみながら、また、環濠内やその周辺には鳥、カメなどの様々な生き物が生息し、大学生や大学院生の保護官の指導を受けながらの暮らしとなっており、滋賀県立大学の「環境性」を大

●提案__多くの手でつくる居場所

本提案では、グラウンドワークにある環濠に大学生や保護官といった一人ひとりで建設できる「生き物たちの居場所」を設ける。この場を作る1年を通じた制作過程を、素材を作ることから始めることで、人が生き物と想う作業風景が生まれる。その風景こそが「生き物集落」そのものといえるのではない。

●これらに必要な環境のあり方

- 保護官の指導
- 大学生
- 生き物
- 自然環境
- 環境共生



2_【環濠】の生き物の生活

●マガモ・アヒル

アヒル・アヒルとマガモは水生動物に分類され、水辺に生息する。マガモはアヒルよりも大きいが、アヒルよりも水辺に生息する。マガモはアヒルよりも水辺に生息する。

●マガモの生息場所

マガモは水辺、池、川、湖などに生息する。マガモはアヒルよりも水辺に生息する。マガモはアヒルよりも水辺に生息する。

●マガモの飼育

マガモは水辺、池、川、湖などに生息する。マガモはアヒルよりも水辺に生息する。マガモはアヒルよりも水辺に生息する。

3_【育てる】から始める協働による居場所づくり

●Phase 1_ 建材を【育てる】

●Phase 2_ 建材を【採る】

●Phase 2.5_ 建材を【つくる】

●Phase 3_ 居場所を【建てる】

●Phase 4_ 土に【甞す】



4_生き物のための【稲土竹葺】



① 稲土を乾燥させた稲土の葺き。葺き水の高低を調節し、水の循環を促す。

② 稲土を乾燥させた稲土の葺き。葺き水の高低を調節し、水の循環を促す。

③ 稲土を乾燥させた稲土の葺き。葺き水の高低を調節し、水の循環を促す。